

# 私が育てたカラス の 赤ちゃんの話 I



ウッドデッキにいた  
カラスの赤ちゃん

石下郁子

## 1、プロローグ

### 2、ウッドデッキにいたカラスの赤ちゃん

### 3、親のカラスと子どものカラス

### 4、子どもを守っていた親のカラス

### 5、親を忘れたカラスの赤ちゃん

### 6、「カーちゃん」という名前に！

### 7、言葉を話すようになったカラスの赤ちゃん

6月のある日、庭のウッドデッキに巣立ち間もないカラスの赤ちゃんが……  
それを狙っている2匹の猫と、上空を飛び回る親カラス。  
これは人に保護されたカラスの赤ちゃんが、自然に帰るまでの記録です。

## 1、プロローグ

---

1年前、猫に襲われていたカラスの赤ちゃんをデッキのプランターから助けて、しばらくの間育てていました。

まだうまく飛べない、巣立ち間もないカラスでした。

ひと月ほど家で飼い、飼ってはいけない鳥といわれ、自然に放すことになりましたが、呼べば答えるほどになつていて、手放すときは涙が出ました。

最初は畑に連れて行き餌をやりに通っていました。

その後も何度となく猫やオナガの集団に襲われたらしく、羽は傷だらけになっていましたが、親ガラスがきょうだいを連れてそばに来て、カラスを見守っていました。

秋風が立ち始めたころ、周辺におびたしい数のオナガの群れを見かけるようになりました。

そのころを境に、今まで朝に夕にたくさんのカラスが移動の中継点として、大型電器店の屋上に集まっていたのですが、その姿がいつせいに見られなくなりました。

カラスはどうもその飛行経路を変えたようなのです。

カーちゃんの家族はみんなより少し遅れて姿を消しました。

その日からしばらくの間、周辺にカラスの姿を見かけることはなくなったのですが、それでもごくたまにカラスの鳴き声を聞く事があると、外に出ていく日が続いていました

ところが今年の3月ごろ、車で外出した帰り、家の近くにある林のそばで、1羽だけでいるカラスを見かけました。そのカラスは手押し信号のところの電線にとまっていた。

あのカラスだ、と確信したのは羽がボロボロだったから。そして体をせわしくゆすって身づくりする、しぐさは紛れもない「カーちゃん」と名付けたあのカラスでした。

かわいそうに、羽は治らなかつたんだね」と私は切なく思いました。

大急ぎで車を家に置いて、自転車と同じ場所に駆け付けました。もういないかもしれない、と思いつつながら。

子どものカラスを飼ってから、私は彼らには危険人物とでも思われているらしく、声をかけたり近寄って行ったりすると、カラスは例外なく逃げて行ってしまいます。

ところがそのカラスは私が声をかけてもそのままじっとしています。

電線の上と下とでしばらくにらめっこが続きました。たまりかねてもっと近づくと、カラスは林のほうに行ってしまいました。

林の中に車も通れる道が通っています。道路伝いに追って行くと行くと、一度見失ったカラスはまたどこかから飛んできて近くの木の上に止まり、じっとしています。

カラスが止まっている木は道路から一段高くなっている林の中で、しびれを切らした私とその山に登っていくとカラスは今度こそ林の奥に入ってしまった。

この話を近くに住む人に話すと、カラスが私の家のそばの電柱によく止まっている、と言っていました。

そして5月21日、聞き覚えのあるカラスの鳴き声に外に出ていくと、ポスト横の石塀の上に珍しく隣の猫が陣を張っています。

その猫は以前、家の藤棚をよじ登り、ベランダ経由で2階の部屋の網戸を開け、我が家に侵入していた猫でした。

その猫がカラスを襲うまで、そんな行動を大目に見ていたのですが、それからは見かけると追い返すようにしていました。それでしばらく近づかなくなっていたのですが、今日は幅15センチほどの塀の上に寝そべっています。

私はカラスを捜したかったので猫に「こら、おうちへ帰んなさい」とだけ言って通りに出ました。

するとカラスが、我が家の屋根のどこかから飛び出してきたのです。そして道路を超えて向かいの家の屋根の上に止まりました。

やはり羽はボロボロ、落ち着かないしぐさ。紛れもなくあのカラスでした。

その後の私の行動は、言うまでもなくカラスの後を追いかけて行ったのです。

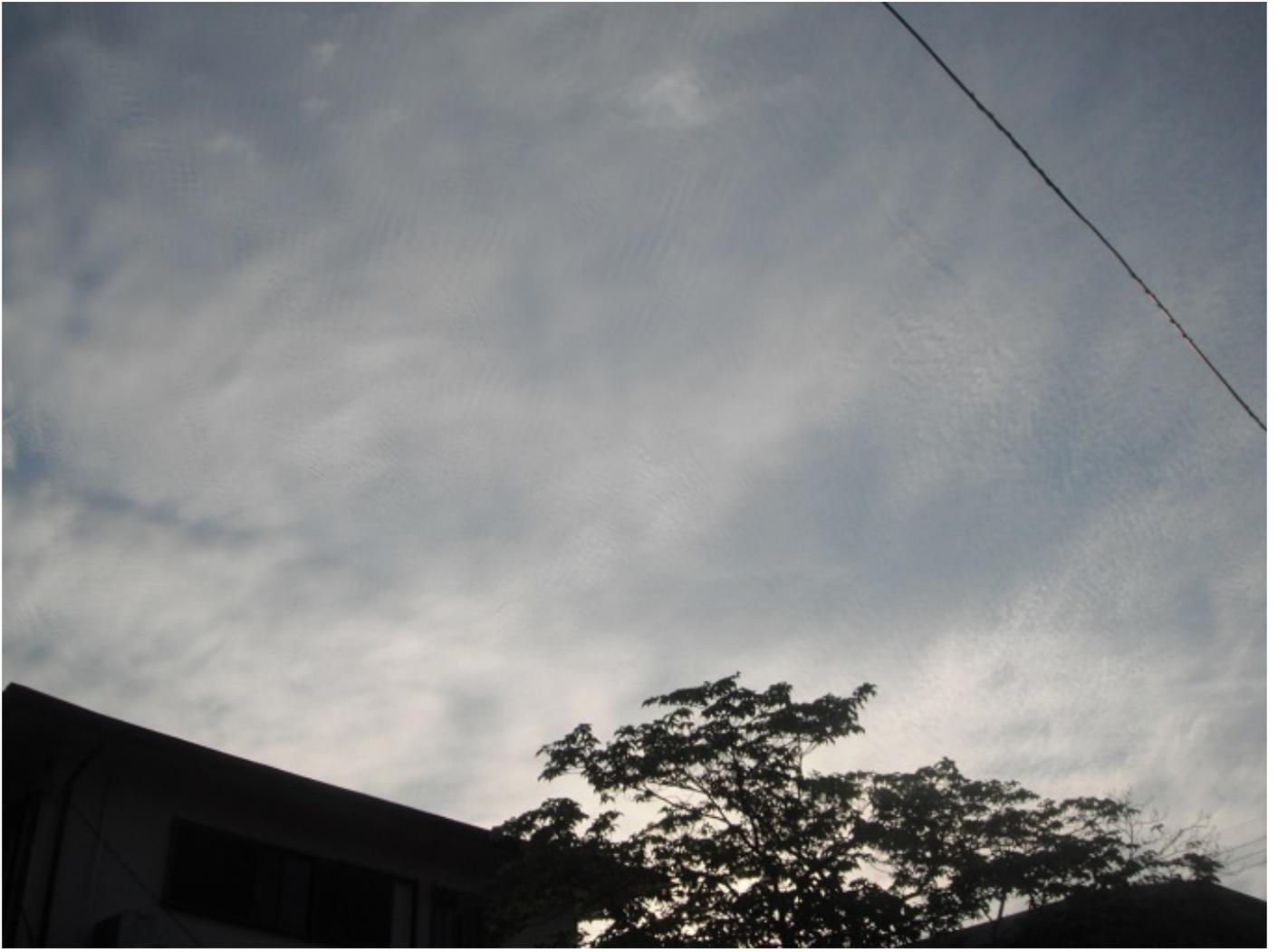
延々と同じパターンが続くので書くのをやめますが、しばらく追って行ってから、カメラを取りに家に帰りました。

カメラを持ってそこに戻ると、カラスはさっきまで止まっていた、何軒か目の住宅近くの電線の上でまだ羽づくろいをしていました。しばらくそうしていましたが、カメラを向けると向こうへ飛んで行ってしまいました。

いい写真を撮ろうと思ったのが間違いでした。なんでもいいからシャッターを押せばよかった、と後悔しました。

後にはハナミズキの若葉の向こう、今しがたまでカラスが止まっていた電線の向こうに広がる空がありました。

私は思わず空に向かってシャッターを切りました。



## 2、ウッドデッキにいたカラスの赤ちゃん

---

2階のベランダから、家々の屋根越しに見える大型家電店の屋上に、ときどき1羽だけにいるカラスを見かけるようになりました。それに気づいたの今年6月半ば。

それまでアレルギーや、天候不順のため洗濯ものを表に干せなかったのですが久しぶりにベランダに出たとき、そのカラスに気づきました。

あれはきっと、私が育てたカラスだとすぐに思いました。

親やきょうだいのところに戻ったと思ったけれど、巣立ち間もなく人間に飼われることになったカラスは、やはり群には馴染めなかったのかと心が痛みました。

1年前の6月19日、そのカラスは私の前に初めて姿を見せました。

お隣の奥さんが、

「お宅のウッドデッキにカラスの赤ちゃんがいて、うちの猫が捕まえようとしています。猫を追い払ってくれませんか」と言いに来たのです。

えっ、カラスの赤ちゃん？

とっさにそう聞き返しました。

カラスといえば何やら不吉なイメージ、カラスの赤ちゃんなんて本当にいるものなの？ もしいるにしても赤ちゃんは山にいるものなんじゃないの？ と思いながら半信半疑でデッキをのぞいてみました。

するとデッキに置いたアロエのプランターの上に小さなカラスが羽を広げて震えていて、そのカラスを2匹の猫がはさみうちにして狙っているのです。1匹はデッキに上がりもう1匹はデッキの下にいます。

猫はお隣の猫。網戸を開けたり藤棚をのぼって2階のベランダや部屋に侵入したり、車の上に乗って寝ていたりする猫です。

追い払ってみましたですがそこを動きません。今にも飛びかかりそうな気配にためらう暇もなく、片手を出して腕に止まらせ、家の中に入れました。

少ししわがれた声で鳴くカラスの赤ちゃん。後で調べてみると〈ハシボソガラス〉という種類のカラスのようでした。口の中は、朱に近い赤、その口を開けて小さな声でガアガアと鳴いています。

水とパンを与えてみましたが何も口にしようとしません。疲れているのか目をぱちぱちさせうつらうつらしています。夕方だったので手ごろな段ボール箱を探して中に入れると、すぐに眠ってしまいました。

しばらくして様子を見ると、なんとカラスの首がありません。びっくりしていると気配で目を覚ましたのかカラスは首を出し、小さくガアと鳴きました。

ああよかった。眠るとき、カラスは羽の中に首をうずめて眠るのね……と胸をなでおろしま

した。

カラスはやはり何も口にせず、また同じようにして眠ってしまいました。

これがちょうど1年前のカラスの赤ちゃんと私との出会いでした。

私はこのカラスに（カーちゃん）という名前を付けました。

これからしばらくの間、このカラスのことを書いていきたいと思います。

### 3、親のカラスと子どものカラス

---

我が家の周辺は同じような住宅や大小の公園が並んでいて、少し足を延ばせば山や川が、また緑地帯も近くにあります。

家の東側には県道が走り、南、西、北側それぞれに住宅が隣接しています。猫がいる家は西側のお宅です。

まだ1、2メートルしか飛べないカラスの赤ちゃんが住宅地に迷い込んだことから、カラスの巣はこの近辺にあったのだと思います。

カラスの赤ちゃんを保護した翌日は、朝から異様に鳴く親ガラスの声で目を覚ましました。

そういえばここ数日、大声で鳴きながら飛びかう大きな2羽のカラスを見かけていましたが、あれは親ガラスが子どもを守ろうとしていたのです。

保護した翌日の朝、親の鳴き声にも関わらず、赤ちゃんガラスは目を覚ます気配を見せません。10時ごろになってやっと目覚めた様子なので段ボール箱から出し、戸外の物置の屋根の上に乗せました。餌は何も食べません。

親ガラスは2、30メートル離れた住宅の屋根や電柱に止まってこちらをうかがったり、鳴きながら上空を旋回したりしながら子どもへのアプローチを繰り返しています。

「鳴きなさい、お母さんに鳴いてここにいるよって教えなさい」

分かるはずもないと思いながら、私は必死でカラスに声をかけました。

しかし子供のカラスは怖いのか声を立てず、親の姿が見えなくなると初めて小さな声で鳴くという感じでした。

気が付くと昨日の猫の1匹がすぐ近くに来ています。

私はカラスから目が離せず、親が何とか子どもを抱えて飛んで行ってくれないかと思っていました。

心配している親に子どもを見せて安心させたい、それなのにカラスを狙う猫がすぐそばに来ている。家の仕事もしたい。

いつまでもこうしているわけにもいかないので、玄関わきの木にカラスを移動させることにしました。

細い枝先の方にいれば猫に襲われた時、こちらも気が付くだろうとカラスをそこに移したのです。

そして玄関の窓を開け、時々見守りながら用事をすることにし、家の中に入りました。

親ガラスは再び姿を現し鳴きながら周辺を飛び回り、しばらくするといなくなり、時間をおいてはまた姿を見せる、ということを何度も繰り返していました。

他にも子どもがいたためだったんですね。その子どもの面倒も見なければならなかったのです。

私は親ガラスの子どもを思う情の深さに心を打たれました。

そして赤ちゃんを、何としてでも親に返してやろうと心に決めました。

長い1日が終わりに近づき、夕方になりました。

気が付くとさっきまでいた木の上に赤ちゃんガラスの姿がありません。あわてて探しに出ました。

北隣の家のおさんが庭にいて、ガラスがさっきまで庭で虫か何かを食べていたと教えてくれました。しかしガラスはもうそこには見当たらず、今度は別の場所で地面をつつきながら餌を捜しているようです。

腰を振りながら鶏のような格好でよちよち歩いているのです。思わず笑ってしまいましたが、気が付くと3匹の猫がガラスを取り囲み、あっという間に1匹がその上に覆いかぶさってしまいました。

私は肝を冷やし、とっさにガラスを抱え、家に帰ってきました。

周辺で鳴く親ガラスの声はその後も続きましたが、やがて暗くなり、ガラス第2日目が過ぎました。

まとまった家事がほとんどできず、私にとっては疲労困憊の終日でした。

## 4、子どもを守っていた親のカラス

---

赤ちゃんガラスの顔には猫に襲われた時にできたらしい傷がいくつもありません。爪を立てられたように食い込んだ傷跡。それに3本の羽が今にも取れそうにプラプラしています。

一方、猫は我が家にカラスがいることを知って、植え込みの影などからじっとこちらを伺うようになりました。それで自分がそばについていけないときは、赤ちゃんガラスを外に出すことができなくなりました。

赤ちゃんガラスの頭にはまだ産毛しかなく、足も柔らかで小さく、口の中は朱色がかった赤です。家の中をよちよち歩き、私が腕を出せばぴょんと乗ってきます。

しかし部屋に放っておくには限界があり、以前飼っていた小型犬のケージがあったので、そこに入れることにしました。

適当な棒を渡して止まり木を作ると、カラスは抵抗なく中に入り、まだ小さかったのでその中で簡単に向きを変えることもできました。

やはり親によく見せたいと思い、ケージを物置の上に置くことにしました。

畑の道具などを入れる高さ2メートルほどの物置が道路際に設置してありました。

親はこの日も周辺を鳴きながら飛んでいましたが、心なしか旋回する時間が前日より短いように思われます。

通りがかった近所のご主人が物置の上の赤ちゃんガラスを見て、この数日、カラスが猫に襲われ、親がそれを威嚇していたことを話してくれました。

最初は2羽のカラスが猫を襲っているように見えたそうです。そばに小さなカラスがいることを知って、親が子どもを守っているのが分かったそうです。

赤ちゃんは時に猫に覆いかぶされたりしながらどうにか難を逃れ、それから十数件の家を少しずつ移動して我が家まで来たらしいのです。

猫に追いかけているカラスを、屋根の上に逃がした人もあったそうです。

猫は簡単に屋根に登りますが、昼間は親の監視があるので近づけなかったのでしょう。

しかし親の目の届かない夜間、カラスの赤ちゃんはどんなふうにして複数の猫の襲撃から身を守れたのか、親が何らかの指示を与えていたのかもしれないかもしれません。とにかく子どもはこの数日間を生き延びたのです。

「では親は子どもが猫に襲われていたのは知っていたんですね」

私は幾分ほっとしてその人に聞きました。

子どもを守ろうとする親ガラスが人を襲うことを聞いていたからです。こうして子どもに関わっている以上、自分も親ガラスに襲われるかもしれないと覚悟していました。それで外に出るときは帽子とマスクと眼鏡を身に着けるようにしていました。

しかし子どもが猫に襲われていたのを親の方が知っていたとすれば、私が子どもに危害をく加えていない事だけはわかってもらえると思ったのです。

実際、いつも猫がその辺にいるのを親ガラスは見ていました。

「今にきっとカラスの恩返しがありますよ」とその人は言って帰っていきました。

カラスの恩返しは、それはなくてもいいけど困ったことがありました。私がカラスを保護したと知って夫の機嫌がどことなく悪いのです。

以前私は全身皮膚病で捨てられていた犬を拾いました。

犬の皮膚病が手当をしていた自分にうつったこともありましたが、いつしか免疫ができたらしく平気になりましたが、犬の症状は亡くなるまで改善しませんでした。

その様子を知っている彼は、

「もう絶対生き物を飼うのはだめだよ」といつも念を押していましたから、カラスに夢中になっている私が気に入らないらしいのです。

「この家に来ないのは、あとは蛇だけだ」と言っていました。

そんな人間をカラスのほうも嫌いました。

これよりもっと知恵がついてからのことですが、夫がそばを通るとくるりと向きを変えるようになったのです。

## 5、親を忘れたカラスの赤ちゃん

---

猫にとっては鳥のひなというのは格好の狩の対象であるらしく、我が家の周辺にはいつもカラスを狙った猫がたむろするようになりました。

一方、人間が与えるものをカラスが食べようとしないので、庭で食べ物を探させるようにしましたが、2、3回も出すと今度はカラスを素手で捕まえることが難しくなりました。

そのために近くに猫が迫ってきても、急いで保護することができません。

何度も飛びかかれたりしながら、いっこうに猫を怖がる様子がありません。返って私に捕まえられまいと逃げようとするので、このままでカラスを庭に出すのは危険だと思うようになりました。

カラスの赤ちゃんは私が腕を伸ばせばひょいと乗ってきますし、よくなついてきましたが、羽に触れられることだけは極端に嫌います。たぶんそれは鳥の本能なのではないかと思います。

そして間もなく物置の上にも猫が近づき、そこも安全な場所ではなくなってきました。

考えた結果、使わなくなったミニ温室用のスチール棚があったのを思いだし、それをリビング前のデッキの上に据え、その中段に鳥かごを入れることにしました。

試してみるとその柵の間に鳥かごがどうやら収まります。これをリビングの前に置けば人間の目も届くし、上空を飛ぶ親鳥にも子どもを見せることもできます。こうしてしばらく様子を見ることにしました。

隣の奥さんからは「カラスをどこか山の中に置いてきましようか」と声をかけられていました。これまでも猫がスズメなどをつかまえ、見せに来ていたと言い「もう死んだカラスは見たくない」と言います。

今、山になど連れて行けば身動きのできないカラスの赤ちゃんは、その日のうちに何かに食べられてしまうでしょう。

近くの山にはハクビシン、タヌキ、アライグマなどがいます。

それで「もう少し大きくなって、飛べるようになってから親に返します」と答えました。

保護されて4日目のカラスの赤ちゃん。こんなふうに全身の羽はボロボロ。

この場所に置かれた直後は、鳥かごから外の方を見ていましたが、1日経つとガラス越しに家の中ばかりを見るようになりました。

屋根に日よけ用の新聞紙を乗せ、猫の襲撃と日差しを避けて、デッキ、庭の物干しざお（つるす）2階ベランダの物干しざお（つるす）と日に何度も移動させていました。

カラスの親は毎日毎日子どもを呼んで大騒ぎしていましたが、このころすでに子どもの方は親を忘れてしまったようでした。



緑と赤のテープは適当なものが見つからず、動く足場を固定したものの。

カーちゃんは赤い色が好きらしく、この後何度も赤いテープをくちばしでほどいていました。

手作りしたドーナツをあげてみましたが、見向きもしません。

外に出せなくなると、今度はカラスに何を食べさせるかが問題になりました。

卵焼きやひき肉、パンなど、カラスが食べそうなものを次々と与えてみましたが、一切口にしません。水さえも飲まないのです。

カラスに反対の夫も「何かしら食べさせないと死んでしまうよ」と心配するほどでしたが、丸1日以上何も口にしませんでした。

そのときいつか庭で、小さな虫のようなものを食べていたことを思い出しました。

ちょうど雨上がりで玄関付近にダンゴ虫が歩いていたので、3匹つかまえカラスの前に置きました。するとカラスはあっという間にそれを食べました。

それで玄関のポーチに連れて行き、猫に襲われない角度にカラスを置いて次々にダンゴ虫を取って食べさせました。

食べるのが遅いと、虫が逃げて行ってしまうので、直接カラスの口に持っていくと今度は、ガウ、ガウと大騒ぎして飲み込みます。

両方の羽を十二単のように横に垂らして口だけを大きく開けていくらでも飲み込みます。  
この時を境に水やほかの食物も口にするようになりました。

ここで新たな問題発生。食べ物は誰かに口に運んでもらうものと思ったらしく、自力で食べることはほとんどしなくなってしまいました。

しかし最初は食べてくれるだけでいいと思っていたので、そんなことは考えもしませんでした。

それと、これは最初から心配していたことですが、飛ぶことを全く忘れている様子なのです。  
飛ぶ場所もなく、親から飛ぶための訓練も受けられないまま人間に保護されてしまったのですから、無理なことかもしれません。

いつかひな鳥の飼育をしている人は、親の代わりに自分も羽を付けて飛ぶ真似をして覚えさせる、と聞いたことがあります が、巣立ちに失敗したこのカラスは、親を見てはいますがまだ多くのことを学ばないうちにはぐれてしまいました。

そしてそれまで親に教わったことをどんどん忘れて行っているようです。自分が鳥であることも忘れかけています。どうも私を親と思い始めたようですから。

夕方、室内に入れて少し運動をさせますが、ただよちよち歩くだけで羽ばたきのまねすらしません。

話に聞いた猫に追いかけられたというときも、1、2メートル飛ぶのがやっとだったと近所の人が出ていましたが、全く飛ぶ訓練をしないでいるうちに、その距離さえも飛べなくなってしまったのではないかと思いました。

カラスはこの3、4日で驚くほど大きくなりましたが、このまま飛べなくなったらどうしよう、それが新たな心配ごとになりました。

## 6、「カーちゃん」という名前に！

---

カラスの赤ちゃんを保護して一週間ほどたったころ、一向に飛ぶ気配を見せないカラスの様子が心配になり、畑に連れて行き飛ぶ練習をさせることにしました。

すぐに猫が近づいてくる我が家の環境では、本当に飛べるかどうかを確かめることもできなかったわけですが、いざ畑で放してみることになると、羽のあるカラスがどこかに飛んで行ってしまうのではないかという心配がないわけではありません。

それで畑に連れて行くのは、朝や日中はさけ、夕方の時間と決めました。

私が乗っている自転車は、以前犬を飼っていた時、その犬を畑に連れて行くために用意した子供乗せ用のもので、しっかりしたつくりになっています。大きな前かごもあるのでそこに鳥かごを乗せ、手で押さえながら畑まで連れて行きました。

途中、国道を通過するので、いささかの抵抗はありましたが覚悟を決めて出かけました。

畑について、かごから出してみました。

このころカラスは私になつき始めて、呼べば答え、近寄ってくるほどになっていましたので、もしどこかに行きそうでも呼び戻せるのではないかという自信のようなものはありました。

そう、このころ私はカラスの赤ちゃんを「カーちゃん」と呼ぶようになっていました。

ハシボソガラスの鳴き声は濁ったガアガアという鳴き声なので、本来はガーちゃんですが「カーちゃん」の方が可愛いのでこの呼び方に決めました。

久しぶりに表に出されてカーちゃんは、その辺を歩き回りましたがやはり飛ぶような気配は見せません。

私はこの時、少し前に子どもの時以来というひどい風邪をひいたため、遅れてしまったオクラの植え付けや、落花生の植え替えなどを少しだけしました。

落花生はもう育ちすぎてしまって、移すのは無理だと考え、途中でその作業はやめました。

1時間ほどしてカラスをかごに入れようとすると、それまで全く飛ぶ気配を見せなかったカーちゃんが私に捕まえられるのを嫌がって少しだけ飛びました。

それでもすぐにかごに入りましたが、こうして畑に連れてくるうちに、カーちゃんは以前の感覚を取り戻すのではないかという希望を持ちました。

親ガラスの方は、日に何度かは飛んで来ていましたが、それも次第に間遠になっていました。別の子どもの世話が大変だったのでしょう。しかしその頃はそうは思えず、親が子どもをあきらめてしまうのではないかということが心配でした。

親が鳴きながら上空を旋回しても一向に興味を示さない赤ちゃんガラスが、いつかは親に見放

されてしまうのではないかと、何らの事情で、親が1度も姿を見せない日があると本当に心配でした。

カラスを飼うことは禁じられていますし、親に見捨てられたらカーちゃんはどうなるのか、私の方が親カラスを待ちわびる日々でした。

一方、カーちゃんはダンゴ虫の丸呑みが過ぎておなかをこわしました。

フンの中に黒いダンゴ虫がそのまま出て来るのです。

折しもダンゴ虫は我が家の玄関付近から絶滅しかかかっていて、探すのも大変になってきました

。

庭の別の場所に行けばいるとは思いましたが、蚊の集中攻撃を受ける体質で、カーちゃんの食事時間、植え込みのそばで虫を探す気になれません。

そこで冷凍庫の中に入っていた、いつの物とも、何の肉かもわからないような肉や魚、それと古くなったごはんなどを、カーちゃんに食べてもらうというアイデアが浮かびました。

(鶏肉は抵抗があってはじきました)。

それにキャベツの芯、人参の皮などを刻んで加えて煮て食べさせました。味付けには栄養を考え少しだけ味噌を加えました。

豚肉、牛肉、魚などのうち、カーちゃんは牛肉が1番のお好みの方でした。喜びようが全然違うのでそれと分かりました。それと卵焼き。

この後、ダンゴ虫をまた見かけたのであげてみましたが、それにはもう興味を示さず、食べなくなってしまいました。

そして食べ物も決して自分では食べようとせず、口に入れてもらうものと決めています。

それも口に運んでやると「ガウガウ」と大騒ぎしながら飲み込むといった行儀の悪さでした。

カーちゃんの将来を思うと少し心配でもありましたが、このころは猫に負けない丈夫なカラスにすることが、1番の願いだったのでした。

## 7、言葉を話すようになったカラスの赤ちゃん

---

畑に連れて行った2度目の時はカーちゃんを鳥かごに入れず、自転車の子どもを乗せる四角いボールのような前椅子の中に入れて行きました。

飛び出さないように網で蓋をしましたが、周りが見えないので不安なのかカーちゃんはこれを嫌がりました。

畑に着くと上の網を取って自由にさせましたが、いつまでもハンドルに止まったままなのでどうしたのかと思ったら、なんと自転車のハンドルから地面に下りることができないのです。

仕方なく下におろしてやるとだんだん行動範囲を広げ、最後には隣の落畑に迷い込み、暗くなる中を大あわてで捜したという一幕もありました。

畑では何か地面のものをついばんでいたようでしたが、食事は相変わらず自分で食べようとしません。

私もこのままではと次第に心配になってきました。

カラスを親鳥に返すためには、成長とともに巣立ちへの準備もさせなければなりません。

親鳥は以前のようにただやみくもに周辺を騒ぎ回るといようなことはしなくなりました。しかしかごを2階のベランダに吊るすとどこで見ているのか、即座に大騒ぎしてあたりを飛び回ります。

しかしカーちゃんは親を忘れてしまっています。

親鳥がこんな子どもをあきらめはしないか、そのことが一番心配でした。

自分で食べる習慣をつけさせようと、そのころから食べ物を目の前に置くことにしました。カーちゃんは両方の羽を垂らしたまま小さく鳴いて催促します。

(なんでくれないの?)という表情をはっきりとするのです。

そのまま置けば餌を入れた器の中に足を入れたり、フンをしたりして台無しにしてしまいます。

根負けして口に運んでやれば大騒ぎしてそれを食べます。

いつまでこうしてやれるだろうか、という思いは保護した当初からありました。

このころカーちゃんは目に見えて大きくなり、初めゆったりしていた鳥かごが小さくなってきました。

昼と夜とで止まり木の位置を変えることくらいしか、対策がありません。

以前犬を飼っていた時、もう1つ大型のケージがあったのを処分してしまったことをこの時になって後悔しました。

あれがあればカーちゃんをもっと楽にしてあげられるのに、カーちゃんが向きを変えるたび天井に頭をぶつけるのを何とかしてやりたいと、そればかり考えていました。

それと、最初はあまり不思議に思わなかったのですが、カーちゃんの食道はまっすぐ下に下りて行かず、右側の方に少しねじれています。

えさを上げる時それに気が付き気になっていました。

カラスはみなこうなのだろうか、しかし左右は対象であるべきでどこかに問題があるのかもしれないと心配でした。

プラプラだった3本の羽も次々に抜けました。

そのうちの一本は、左右に対になった羽で、何か特別な働きをするのではないかと思うようなものでした。カーちゃんは抜け落ちた羽を見て不思議そうにしていました。

一方、デッキのスチール製の棚の上も決して安全なところではなくなってきました。そこにも猫が来るようになったのです。そして時として飛びかかれます。カーちゃんはそれを交わします。

しかしカーちゃんは話に聞くシマウマと同じ、猫に恐怖を感じていません。カーちゃんが怖がっているのは自分の上空を飛び回る親ガラスです。

カーちゃんが私の言葉をまねるようになったのはいつごろからだったか、はっきりとは覚えていません。でもカーちゃんは、たどたどしく言葉をしゃべるようになったのです。

7月初めに友人に会った時、カーちゃんのおしゃべりの話をしていますから、それより前であったことは確かです。

夕方、室内に入れて少し運動をさせた後、黒い布をかけて「ねんねね」と言って休ませます。

そして朝その覆いを取りながら「おはよう」と声をかけていましたが、カーちゃんはいつの間にかそれを覚えて口にするようになったのです。

夜、カーちゃんは「でんねー、でんねー、でんねんねんねん」と言い、朝は朝で「オワヨッ」と声をはりあげます。

でも朝は人間の方が忙しいのでどうしてもカーちゃんの話は後回しになります。それでついほっておくと、鳥かごの中でぴょんぴょん向きを変えて飛びながら「オワヨッ」を連発するのです。

名前を呼べば即座にガアという声が返ってくる、日中いつも私の動きを見ている、こんなことがいつまで続けられるのかという思いが胸の中にわいてきた、切ない日々の始まりでした。

## 私が育てたカラスの赤ちゃんの話

- I ウッドデッキにいたカラスの赤ちゃん
- II カラスのきょうだいたちがやってきた
  - III 畑で暮らすカーちゃん
  - IV 畑で暮らすカーちゃん (2)
  - V 公園のカーちゃん

VI 『夕焼、小焼の あかとんぼ』

## 私が育てたカラスの赤ちゃんの話 I

<http://p.booklog.jp/book/75226>

著者：石下郁子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/thmo2535/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75226>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75226>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ